
2023年度第5期311ゼミナール

大熊未来塾 水俣・沖縄視察

プチ活動報告書

【メンバー】

- 3年 石川 あいり
- 3年 村上 真綺
- 3年 原 萌夏

【目次】

- 1 大熊未来塾について
- 2 大熊未来塾の聞き書きプロジェクトについて
- 3 水俣視察(9月14日～9月17日)
 - ・1日目(9月14日木曜日)
 - ・2日目(9月15日金曜日)
 - ・3日目(9月16日土曜日)
 - ・4日目(9月17日日曜日)
 - ・感想
- 4 沖縄視察(11月15日～11月19日)
 - ・2日目(11月16日木曜日)
 - ・3日目(11月17日金曜日)
 - ・4日目(11月18日土曜日)
 - ・5日目(11月19日日曜日)
 - ・感想

1 大熊未来塾について

- ・福島県大熊町を拠点としている NPO 法人
- ・代表：木村紀夫さん
- ・木村紀夫さんの父、妻、次女は震災で犠牲になった。次女はまだ見つかっていない。原発班と関わりがある。沖縄編最終日に登場する具志堅さん（沖縄戦の遺骨収集ボランティア）が福島に行った時に次女の遺骨の一部を発見したという経緯がある。
- ・↓木村紀夫さんのドキュメンタリー
<https://youtu.be/Ovdc1uCFDpg?si=FmKzvSrNTAKRS6Sy>
- ・“【NNN ドキュメント】11年探し続けた父... 津波で犠牲になった娘との再会 東日本大震災と福島第一原発事故 NNN セレクション”
- ・現地語り部、オンライン授業、講演の3つを柱として伝承。

2 大熊未来塾の聞き書きプロジェクトについて

- ・大熊未来塾は、震災と原発事故の被災者、大熊町民からの聴き取りプロジェクトを2024年度から本格化させる予定。
- ・2023年度はその前段として「聞き手」を育てるための視察研修を企画した。
- ・視察先は、災禍の伝承地として共通のテーマを共有する水俣病の熊本県水俣市、戦地だった沖縄県。
- ・広く若者の参加を募る中で、未来塾がゼミ担当の武田真一先生が代表理事を務める震災伝承連携団体「公益社団法人3.11メモリアルネットワーク」のメンバーであることから、事務局から宮教大生への呼びかけ要請があった。
- ・311ゼミでは、一つの情報としてゼミ生に募集案内を紹介
- ・個人的に関心を深めた3年石川あいろが水俣へ、3年村上真綺と原萌夏が沖縄視察に個人の資格で参加した(水俣視察のメンバーは10人、沖縄視察のメンバーは14人)

3 水俣視察について

○旅のしおり

	内容	場所
1 日目	鹿児島空港到着	
	水俣病センター相思社 小泉初恵さん	水俣歴史考証館
2 日目	フィールドワーク 吉永利夫さん	エコパーク周辺、吉永さんご自宅
	きぼう・未来・水俣講話	きぼう・未来・水俣事務所
	現地の人との交流会	相思社
3 日目	からたち 大澤さんのお話	
	SUP 体験	
	講話 坂本しのぶさん	おれんじ館
	講話 杉本肇さん	杉本さんご自宅
4 日目	講話 緒方正人さん	公民館
	羽田空港到着	

○視察からの学びと気づき

【1 日目】

★水俣病歴史考証館

①メディアや行政が正しい情報を伝える大切さ

水俣病歴史資料館で、水俣病公式確認の 10 年後にも関わらず、魚を分けて食べている家族の写真を見た。メディアや行政が危機感をもって正しい情報を発信していれば、地域の住民の認識も変わり、もっと被害を押さえることができていたかもしれないことが確認するべきだと感じた。



②行政の偉いや影響力のある人が動くことで、世間の目は変わるかもしれないこと

当時の市長はチツソよりであったとお聞きした。これは、世間体を気にして裁判に参加しない人がいたことや、患者にひどい言葉が届いたことに影響していると考えます。福島の今の影響力がある人は原発にどのような考え方を持っているのかが今後の活動に強く関わると感じました。

③土地の名前が病気になっていることの影響

水俣病は決して水俣だけの病ではない。土地の名前を使うことで、その土地に住む人が勘違いされたり、二重三重の被害を生む原因になることもある。地名を病名にしてはいけないと感じました。

④まちづくりの方針のズレがあると困ること

水俣の中には、いろいろな立場・考えを持つ人がいた。単に企業対住民ではなく、企業内や住民間、また行政も絡んだ対立の関係が垣間見えた。今の水俣は、水俣病がまだ終わっていないと考える人の「水俣病を生かしたまちづくり」、一方で水俣病はもう終わったものと考えられる人たちの「水俣病って言われたいまちづくり」の感覚のずれが発生していると感じました。

【2日目】

★吉永利夫さん

①「ものがあると語れる」ということ

エコパークにあるお地蔵さんは患者さんの手作りであった。残るものがあることで、100年経って覚えている人いなくなっても手を合わせてくれる人がいる。また、吉永さんは奥さんの思い出のものをご自宅に大切に保管していて、ものを見せながらお話をしていただいた。被災地では、被災した建物をみると思い出して辛いという人も多いけれど、後世に歴史を伝えることのできる貴重な資源だと考えた。そういった“もの”が被災地にあるか考えた。

②地域学習に求められていることは難しい

地元の学習について水俣病の犠牲・戦いが今も続いているため、単純に美しいまちといった勉強には持っていけない現状をお聞きした。そしてワンパターンになりがちという課題もあるという。大熊町でも元々生活していた地域に戻れない人の戦いが続いていて、軽い気持ちで学習を良い方向にまとめてはいけないと感じました。また、悲しく暗い話だけで終わるのでなく、昔の豊かな自然や明るい人々の暮らしの様子の学習もしたいなと考えた。

③「あたりまえ」は人が死んで苦労してできていくもの。あんまりあたり前って思わないほうが良いこと

今は「なぜ魚を食べているの?」「裁判に参加しないの?」のような信じられないといった行動も、当時の人からしたらそういう生き方・感覚があたり前であったことに気付いた。何か大きな事件が起きないとあたりまえを変えることは難しいと思う。公害も震災も今のあたりまえを変える大きな事件だと感じる。今行動することで、新しい考え方を作っていかないと考えた。

④地域外の人にしかできないこと・地域外の人だからできることがある

外の人が被災地の活動をするについてお話をお聞きした。世間体や周りの目があって中の人動き出すのは難しい。恥も外聞もない外の人こそ、内の人ができないことを始められると教えていただいた。その際は、つながりを作って後ろ盾を持つことが大事だとおっしゃっていた。

確かに地元のこととなると、目立ってしまう感じはあると思った。もともとある地域とのつながりがプラスにもなるし、マイナスにもなる。吉永さんのように強い意志をもって活動を始めることができるのはすごいと感じた。



★きぼう・未来・水俣講話

①どの患者さんも小・中学校時代に良い思い出がありません

もし当時子どもに寄り添って話をよく聞いてくれる存在がいたらと思った。教師、また地域の大人の関わり方が子どもの育ちに影響すると感じた。

②記録には残らない人々の苦しみ

胎児性患者が明るみになり、魚を食べて流産や死産が怖くて子どもを産めなかった人たちが、たくさんいたことを学んだ。記録としては残らないことだけでも、忘れてはいけない出来事だと思った。ききがきをすることで、記録には残っていない人々の葛藤や苦しみが見つかるかもしれないと感じた。

【3日目】

★からたちのお話

①「他人に毒を盛られた者は、決して他人に毒を盛らない」という言葉

毒という強い言葉が印象的だった。福島原発事故は毒がまかれたというような感覚はあるのだろうかと思問に思った。

②サップ大会のスピーチの話

1日目の考証館でもお聞きした感覚のズレ。サップに対する大澤さんと行政の水俣感の違いを聞いた。



★サップ体験

①水俣の海はサンゴ礁の海に近いということ。

実際に海岸に行ったことで、砂浜に色鮮やかな貝殻が落ちていることや海がきれいな色をしていることに気が付くことができた。東北の海水浴場と違って磯のにおいがしなかったように感じる。



★坂本しのぶさん

①日本の行政の対応が事務的であること

被害者が目の前にいるのに、紙に描いてある決まったことしか言えない日本の大臣の話聞いて、事務的で形式的な日本の対応にがっかりした。行政と患者さんが話し合うことができたらしいなと感じた。話し合うことで理解が深まればいいと思う。

②特別扱いをしない関わり方のもたらす良い影響

しのぶさんの子どものころのパワフルなエピソードをお聞きした。自分の行動によって、出来ることを大人に伝えている様子がすごいと感じた。話の中で、しのぶさんのお母さんは胎児性患者のしのぶさんを保護するのではなく、出来ることは自分でやらせ、何も恥ずかしくないとしのぶさんを前に出していた。特別扱いをせず関わっていたことは、しのぶさんの考え方・生き方に強く影響していると考えた。

★杉本肇さん

①話し合うことで現実がわかること

水俣病を触れてはいけないもののような扱いをしてきたことで、市役所の人水俣の人が知らない状態になっていた。この状態は罪深いと気づき始めた。話してやっと現実が分かったという。福島でも辛いからと言って向き合うことを避けてしまうと、現実を知らない状態になってしまうと危機感を感じた。今回様々な人に会って話を聞いて、事前に呼んだ資料では分からないことをたくさん聞くことができた。本当に当事者と話をしてみないと分からないことがたくさんあると感じた。

②「水俣の子どもたちのため、子どもたちがここで生まれて良かったと思えるように活動(ききがき)をしている。」という言葉

被害を受けた人たちのためだけでなく、これからこの土地で生活する子どもたちのために活動をしているという点が印象的だった。

【4日目】

★緒方正人さん

①現状に違和感を抱くことの大切さ

人間であるより患者であるが前に来てしまい、次の見通しが無いのに認定申請をしてしまった。終わりのない問題として捉えなおしたくて水俣病の申請を取り下げたとおっしゃっていた。自分だったら認定を受けることができたなら、その状態を受け入れてしまうと考えた。現状に違和感を感じ、強い決断をしているのがすごいと感じた。



②「一番傷ついているところ(土地)に詫びを入れていない。」ということ

人対人ではなく、人対自然という新しい考え方に驚いた。原発事故の後に土地に対して、どんな取り組みをしているんだろうと興味を持った。自然と人の関係について改めて考えさせられるなど感じた。近年、自然を資源としてしか見ることができていない、世間が舐めているから、自然を汚染した時の反発が弱いとおっしゃっていたことが印象的だった。自然をまつことで感謝や恐れを感じる事が、人々の認識を変えるうえで大切だと学んだ。

③公害によって身体的なものだけでなく関係もこわれてしまったこと

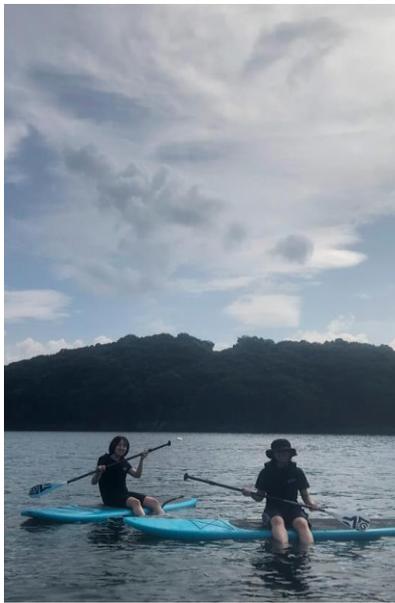
壊れたものと言われると物質的なものを考えてしまうけど、確かに震災によって地域の関係性も壊れてしまったと感じた。壊れた人間関係を直す水俣の「もやいなおし」のような活動が大熊町でもできないかなと考えた。

〇感想

【石川あいり】

4日間の水俣研修では、たくさんの人に出会い、実際に土地に触れたことで良い気付きをたくさん得ることができました。水俣の人達はみんな優しく、水俣病について勉強したい私達を温かく迎え入れてくれました。また研修中水俣の海をたくさん見ることができ、水俣の自然の豊かさを感じることができました。研修前には学校で学んだ内容+自分で事前学習した水俣病の歴史や症状、各地で起こった裁判の判決、お話を聞く方々の情報を頭に入れていましたが、実際に現地に行くと、紙やネット上の文章では書いていないことを聞くことができたり、理解が深まったことが多くありました。特に緒方正人さんのお話は事前学習で「私はチッソだった」の意味がぼんやりとしか分かっていませんでしたが、実施にお話を聞くことで、緒方さんの考えの理解が深まったように感じました。そして教員として公害をどう学習していくか改めて考える機会になりました。

どの日も活動が充実していて、学びや考えさせられることが多い4日間でした。311ゼミの人達にも経験を共有し、今後の活動に活かしていきたいと思います。素敵な研修に参加させていただき本当にありがとうございました。



4 沖縄視察について

○旅のしおり

	内容	場所
1日目	那覇空港着（移動日）	
2日目	フィールドワーク 教職員組合 下地文彦先生	ひめゆりの塔・資料館、 魂魄の塔、米須海岸、韓国の塔、工事 健児の塔、 平和祈念資料館・平和の礎、 アブチラガマ
3日目	対馬丸祈念館見学	対馬丸祈念館 旭ヶ丘公園
	ワークショップ 「なぜ“のこす”のか」	さびら事務局
	移動（那覇～辺野古）	
	まちあるき 嶋下さん	辺野古基地周辺
	夕食&交流会 金城さん	民宿クッション
4日目	移動（辺野古～伊江島）	
	謝花悦子さんのお話	ヌチドゥタカラの家
	伊江島散策	城山、芳魂の塔、ユナパチク壕跡、二 ーバンガズィマール、湧出、団結道 場、ニイヤティヤガマ
	移動（伊江島～那覇）	
5日目	遺骨収集同行 具志堅隆松さん	糸満市
	羽田空港着、解散	

○視察からの学びと気付き

【はじめに】

○沖縄戦の概要

1945年3月26日、米軍は慶良間の島々に上陸を開始する。慶良間（けらま）は那覇から西に離れたところに位置する島。米軍は、1500隻の艦船と54万8千人の規模で沖縄上陸作戦を展開。「因幡の白兔の話のように船の上をピョンピョン跳ねて那覇まで渡れそうだった。」という。4月1日、沖縄本島西岸に上陸開始。首里城をはじめ琉球王朝の貴重な文化遺産は徹底的に破壊された。6月23日、日本軍最高司令官である牛島満が「死ぬまで戦え」という命令を残して自決した。それを取り消す人もいないため、泥沼化した。

○時間稼ぎと集団自決

沖縄戦で日本軍は地下陣地にたてこもり、持久作戦をとった。沖縄戦は本土決戦準備のための時間稼ぎの意味があったからだ。そのため、住民の犠牲が増大した。

集団自決は小学6年生の社会科で触れる内容である。「集団自決」という言葉だけでは、沖縄の住民が死を自ら選んだという意味と捉えられがちである。実際は、日本軍から手りゅう弾が配られたこと、犠牲者の中には赤ちゃんや子どもといった自分で判断できない者も含まれていること、日本による教育の結果であるということを鑑みると「自決」という言葉はふさわしくない。沖縄で出会ったガイドたちは全員「強制集団死」という言葉を使っていた。ちなみに、24年度から使用される小6の教科書では「集団自決に軍の関与があった」という記述が無くなるようだ。

○ガマ

ガマとは、鍾乳洞の洞窟のことである。沖縄戦においてガマは様々な使われ方をされた。鍾乳洞の洞窟は自然でできたものであるが、構築壕と呼ばれる人の手で掘られた洞窟も多数存在する。ガマは相当に過酷な環境であった。アブチラガマ見学時も、想像を絶する話を聞いた。しかし、それ以上に地上が危険であったことから、劣悪な環境であるガマが安全地帯であった沖縄戦の凄惨さをおさえておきたい。

【2日目】＜実質初日＞

2日目は元教員である沖縄県教職員組合の下地文彦先生のガイドのもと、戦跡を訪ねた。

◆ひめゆりの塔

①ひめゆり学徒隊について

ひめゆりとは、沖縄県女子師範学校、県立第一高等女学校の愛称である。1945年3月23日。ひめゆりの生徒たちは戦場に動員された。沖縄戦では、沖縄県の全ての中等学校と師範学校の生徒が戦争に駆り出された。ひめゆりの生徒は陸軍の病院に派遣された。病院と言っても、壕の中に粗末な2段ベッドがあるのみで、治療を施すことはなく手術と言われれば全て切断手術だったという。まだ体温を持った切断した足を外に捨てたり、死体を埋葬したりすることも多々あった。壕の外は「鉄の暴風」と呼ばれるほど砲弾が飛び交う危険な状態であったため命がけの仕事であった。

②資料館の最初の写真と最後の部屋

ひめゆり平和祈念資料館に入って一番最初に展示されているものは、集合写真である。数十人の沖縄の女の子たちが並んで笑顔浮かべている、そんなごく普通の集合写真である。

資料館の一番最後の部屋では、まるで卒業アルバムの写真のような女学生ひとりひとりの写真が壁一面に貼られていた。ひとりひとりの写真の下には、名前、どんな性格の生徒であったか、どのようにしてこの世を去ったか、といった説明書きがある。

以前は、全て「軍国少女」「軍国教育」に関連する、軍事色が表れるような展示の仕方だったが、2021年のリニューアルに伴い、その一番最初の写真が飾られたのだという。最初の方は楽しい学生生活を表し、急に戦争一色の学生生活に変わる様子を表す展示の仕方となっている。また、師範学校・女学校ということはつまり、エリート校でありエリートたちが集まっていた。その生徒が、正義のための戦争だと教育され信じていた。



③ひめゆりの塔だけではない



前述したように学徒隊として戦地に行ったのはひめゆりの生徒だけではない。それぞれの学校にそれぞれ慰霊の塔が建てられている。例えば、梯梧（でいご）の塔はひめゆりの塔から直線で100mの場所に位置するが訪れる人は皆無である。ずるせんの塔は、野戦病院だけでなく前線にまで行った死亡率が特に高い学徒隊の塔である。なぜ、ひめゆりの塔が有名なのか。それは、ひめゆり学徒隊では教員が引率していたためである。ひめゆり学徒隊に引率し、生き残った教員は生徒の家族に怒られながらも遺族のもとにまわり、活動していた。一方、他の学徒隊は教員が行っても追い返されるなどして生徒のみが戦地に行った。そのため、行かずに生き残った教員は戦後も生徒の家族に隠れるようにして生きていたという。その活動の違いが今の知名度の違いとして表れている。

◆魂魄の塔

① 3万5千

魂魄（こんぱく）の塔は、沖縄本島の南端に位置する。すぐそばが海ということは、何をするにも逃げ場がなかったという意味である。一時3万5千人から4万5千人分の遺骨がここに収められていた。今は象徴遺骨として3、4人分の遺骨が眠っている。6月23日は、芝にごちそうや果物などが様々並べられ、にぎわう。（沖縄のお墓参りに関する風習は宮城とかなり異なる。）

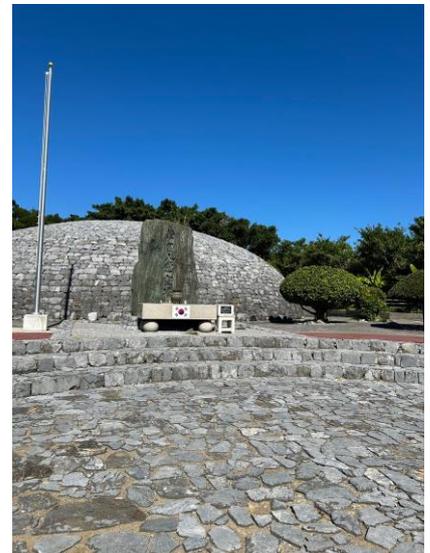


② 78年前、この海は、

魂魄の塔から2、3分ほど歩くと青い海という言葉では言い表せないほど青く、どこまでも続く海が広がっていた。私たちはしばし、この沖縄の海を思い思いに眺めていた。しかし、78年前のこの海では、1500の艦隊がこちらを向き、至る所に死体が転がっている、絶望の海であったと下地さんは話した。

◆韓国の塔

沖縄戦では韓国・朝鮮出身の若者が強制的に日本軍に徴兵され、1万人あまりが命を落とした。韓国の塔では「あるいは戦死、あるいは虐殺されるなど惜しくも犠牲になった。」と、「虐殺」という強い言葉が彫られている。これには強い怒り、恨みが込められている。



◆工事健児の塔

工事健児の塔とは、沖縄戦に動員された今でいう工業高校の男子生徒たちの塔である。ガマの外に出て電話線をつなぐ、非常に危険な仕事を担い、死亡率は90%と言われている。韓国の塔と工事健児の塔は平和祈念公園の敷地内に位置する。

◆平和祈念資料館

娘の身売りを勧誘する立て看板、敵機一覧、小さな子どもの遺体に虫がわいている写真、小学校に墜落したジェット機...

資料館には沖縄戦の歴史が詰まっていた。しかし、ここに詰まっている歴史も沖縄戦の記憶の断片にすぎないということも忘れてはならないと思う。

平和祈念公園に行く道中で、この資料館で必ず見てほしいポイントを下地さんは言った。それはガマのなかで赤ちゃんの口を塞ぐ手についてだ。資料館の中にはガマを再現したひとときわ薄暗く、砲弾の音が鳴り響くゾーンがあった。赤ちゃんの泣き声によってアメリカ軍に見つかったら困るから、母親と見られる人形は赤ちゃんの人形の口を塞いでいた。そのようなことが各地で起きていた。そのまま赤ちゃんが窒息死してしまったり、ガマから出て殺してきなさいと他の人から言われたりしたようだ。

◆平和の礎（いしじ）

右の写真は資料館の展望台から平和の礎を見たものである。写真左端の白く丸いところの中心に「平和の火」がある。その火を見るように同心円状に 118 基の碑が広がっている。



・ 県営平和祈念公園“平和の礎（いしじ）”より写真引用

<https://heiwa-irei-okinawa.jp/facility/heiwanoishiji/>



①あと少しで、ここに刻まれている人の顔を覚えている人が地球上からいなくなる

平和祈念公園の海側には、平和の礎という沖縄戦で亡くなった人の名前が刻まれた碑が並んでいる。ひめゆりで見た写真の子たちにとっても、この平和の礎に刻まれている人たちにとっても、もうすぐこの世に自分の顔を覚えている人がいなくなる。

②～～の長男、～～の一子

～～（人名）の長男、～～の一子というような記載が多くみられた。名前を付ける前の赤ちゃんのことかもしれないし、身近な人が全員亡くなって「あの家には7人子どもがいたな」程度でしかわからないという事情があるのかもしれない。

③外国人、軍人、住民が同じ礎に刻まれていること、刻まれていないこと

この平和の礎には、外国人も軍人も住民も同じように刻まれている。例えば、軍最高司令官、つまり戦犯である牛島満も、何の罪もない住民と同じように刻まれている。また、記載は申告制であるため、申告していない人はここに刻まれていない。韓国の塔で1万人あまりの韓国・朝鮮出身の若者が犠牲となったと刻まれているのに対し、ここに刻まれている名前は450名くらいである。その理由は、慰安婦問題である。慰安所があちこちに設置され、日本兵29人に対し慰安婦は1人配置された。慰安婦問題、慰安所に関しては資料館でもほんの少ししか説明はない。

◆アブチラガマ

①アブチラガマの言葉が表す意味

“アブ”とは、深い縦の洞穴。“チラ”とは、沖縄の方言で崖のこと。“ガマ”とは、沖縄の方言で洞窟や窪みのことを指す。ガマは、沖縄戦のタイムカプセルのような意味合いがあるとき

れている。アブチラガマのような自然の洞窟は、沖縄本島中南部のほとんどが隆起サンゴ礁でできていて、数十万年にわたる雨の浸食によってできた。

②「命どう宝(ぬちどうたから)」

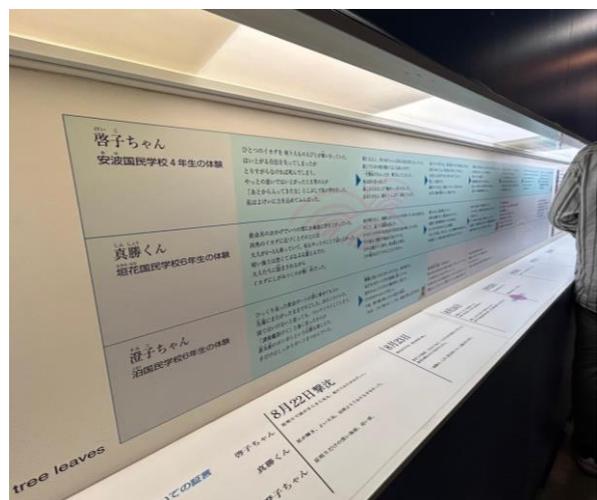
アブチラガマは、沖縄本島南部の南城市に位置する全長 270 メートルの自然洞窟(ガマ)である。沖縄戦時、このガマは住民の避難指定場所であり、日本軍の地下陣地、そして倉庫としての役割を持っていた。戦場が南下するにつれて、南風原陸軍病院の分室として使用された。1945(昭和 20)年、軍医や看護師、ひめゆり学徒が配属され、約 600 人の負傷兵が運び込まれ、手当に当たった。1 ヶ月も経たずに、南部への撤退命令が出され、重症患者が置き去りにさぜるおえない状況だったという。米軍の攻撃に遭いながら、生き残った負傷兵 7 人ほどと約 50 人の住人が米軍の投降勧告に従って、ガマに入って 3 ヶ月後にガマを出た。アブチラガマに限らずガマは、人々の命を救ってくれる重要な場所であった。

【3 日目】

◆対馬丸祈念館

①対馬丸とは

1944 年、お年寄り、乳幼児、女性は沖縄県外へ疎開するように指示された。危ないから疎開するという意味もあるが、兵士のための食料を確保するために沖縄で暮らす人の数を少なくしたかったという意味合いが色濃い。対馬丸は学童集団疎開の子どもたちをたくさんおせて鹿児島へ避難するところであった。まるで荷物のように船に寄せられた子どもたちだったが、修学旅行に行くかのようにきょうきしていたという。しかし、海はすでに戦場であった。もうすぐで着くという夜、アメリカの潜水艦の魚雷攻撃によって沈没し、乗船者の約 8 割が死亡した。



②極秘

生還者は救出後、警察や憲兵から「撃沈の事実は決して語ってはいけない」という「箝口令(かんこうれい)」が出された。家族にさえこの出来事を話せず、監視されることもあった。この長い手紙は、生還者の 19 歳の青年が祖父母にあてて書いた手紙である。手紙を正規の方法で出すと検閲されるため、こっそり船員さんに渡しその船員さんが祖父母のもとに届けた。

◆さびら ワークショップ

①さびらってなんだ

さびらは教育旅行や平和学習事業などを手がける株式会社である。例えば、修学旅行生に WS を実施している。20 代 30 代の沖縄出身の社員が主になっていて、子どもたちは「またグロテスクな話を聞く 6 月がやってきた」と思っていた沖縄戦について、なぜ学ぶことが大事かという姿勢について検討している。

WSでは、「なぜ“のこす”のか」というテーマのもと進められ、まずなぜ遺構や記録を残したいのか、そして残す未来と残さない未来の違いについて議論した。

②「家族は自分の話を受け止める相手じゃない」

大阪大学の大学院生、石川勇人さんの話を聞くプログラムもあった。石川さんは社会学、特にオーラルヒストリー（口実史）を専攻している。大学2年の時から約6年、70名以上の沖縄戦経験者等にインタビューをしている。インタビューのなかで、とあるおばあさんが沖縄戦での南部での様子を尋ねると号泣してしまったことがある。沖縄戦の話は家族もそのおばあさんから聞いたことがなかったという。おばあさんは「今まで話す相手を見つけられなかった。家族は自分の話を受け止める相手じゃない。」と言った。



このように沖縄戦のことを語る人は本当は喋りたくないんだけどね、と言う。「でも喋らないとなかったことにされる」という思いで石川さんのインタビューを受けていたようだ。

③さびらのHPに掲載されたよ

<https://www.savira.co.jp/post/keisyoworkshopokinawatohoku>

“【継承を考える】大熊未来塾✕さびらワークショップ開催”株式会社さびら 更新日：2023年12月8日（閲覧日：2023年12月15日）

◆辺野古まちあるき

那覇から辺野古に移動し、辺野古基地の周辺を鴨下さんとさらささんという隣町の宜野座に住む2人のガイドのもと、散策した。

①厳重な警備

基地周辺には至る所に監視カメラがつけられている。これは反対運動をする人などの顔を覚えるためのものである。また、警備員も各所に配置されているが、私たちが普段目にする警備員とは似ても似つかない。私たちが通っても顔をピクリとも動かさず姿勢よく立つ姿に物々しさを覚えた。そして、警備費は1日1000万円かけているという。

②生活に根差す基地

辺野古では米軍の軍人たちに「こんにちは」とよく声をかけられた。夜遅く、23時ごろになっても軍人たちは町を歩いていた。

基地では年に1度フェスティバルが実施されるという。フェスティバルでは日本の民間人でも基地に入ることができる。しかし、誰でもというわけではない。基地に入る前に身分証を提示する必要がある、反対運動をする人やある国の国籍の人などはフェスティバルといえ

ど入ることが許されない。一方で、留学感覚で基地内で働く日本人の若者も一定数いるようである。

また、沖縄では戦車が公道を走り、日常的に戦闘機が空を飛んでいる。住民であるさらささんによると、オスプレイは他の飛行機と音が全く違い、内臓に響くような感じがするそうだ。



◆交流会

辺野古住民である金城武政さん、一緒に街歩きをした鴨下さん、さらささんらと交流しつ夕食をとった。

①金城武政さん

金城さんは、アメリカ軍普天間飛行場の辺野古移設に反対し、座り込みも20年している。金城さんが高校生の時、強盗目的のアメリカ兵によって母が殺害された。反対運動をしている辺野古の住民は、金城さんを含め2人のみである。

②反対運動をする人が少ない理由

辺野古を取り巻く環境は「辺野古の住民 対 米軍基地」という単純な構図ではなく、もっと複雑なものである。基地があることによって、辺野古の住民には年2回手当が出る。その手当があるから表立って反対できないと考える人も多い。また、金城さんら反対運動をする人に対し、辺野古の住民が嫌がらせをすることもするという。

③金城さんが反対運動をする理由

金城さんが基地に反対する理由は「辺野古が自分のふるさとだから」だという。子どものころ、釣りをしたり、海で野球をして遊んだりした、大切にかけがえのない、守りたい自分のふるさとが国の権力によって奪われたから、反対運動をしている。

【4日目】

◆伊江島

①伊江島について

沖縄本島の本部港からフェリーで約 30 分。島でひとときわ高くそびえ立つ標高 172 メートルの城山(ぐすくやま)が目印だ。島民には"タッチュー"という愛称で親しまれている。伊江島は沖縄北西部、美ら海水族館のほぼ西に位置する島である。伊江島は「沖縄戦の縮図」とも呼ばれており、今もなお島の 3 分の 2 が軍用地となっている。

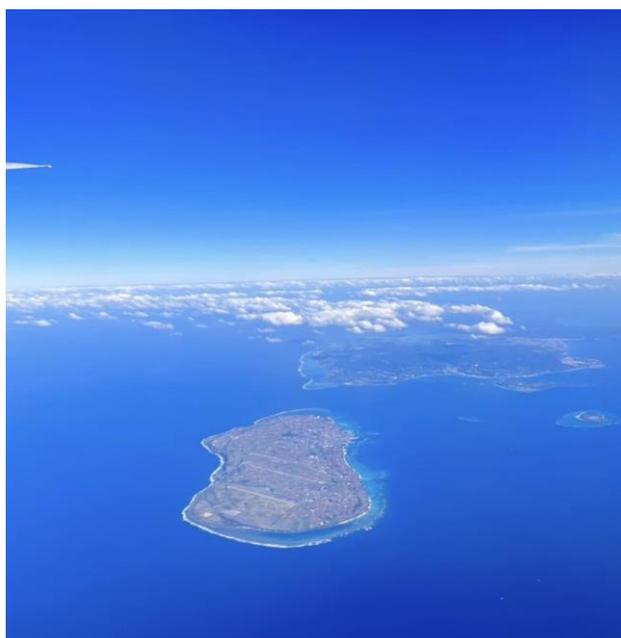
①-2 城山(ぐすくやま)の足跡...!?

まず、城山はオフスクレープ現象という世界的にも珍しい岩山である。この山の急な斜面を登り切り、山頂までいくと中心に大きな足跡が残されている。「カタンナーパの足跡の伝説」と題された石碑からも読み取れるが、島に住んでいた大男の伝説が残されている。

②伊江島の"いま"

現在、伊江島に住んでいる住民は減少傾向にある。一つの例として、役場の半分以上は島の外から来た人たちで成り立っている。伊江島で生まれ育っても、大学卒業後ここで働く島の人にはほほいない。人口不足のいま、伊江島で地域活性化の取り組みで銘柄牛の飼育に力を入れてきた結果、"牛の方が多くて牛で生きている島"となった。人口 4500 人に対し、牛の数は 5000 頭前後になる。牛以外では、畑に食物が育っていると思えば、それらはすべて牛の食料になる草であったり、たばこの材料が育てられていたりする。この島の人たちが直接、生きるための食料はどこにも見当たらない。衝撃的な事実がそこにはある。

「世界中でどこにもない記録がここにある。」何より平和の未来を願い、伊江島という場所が私たちに伝え続けている。



◆ヌチドゥタカラの家

①ヌチドゥタカラの家

1984（昭和59）年に開館した伊江島の南東、伊江ビーチのすぐそばに位置する反戦平和資料館。ヌチドゥタカラは「命こそ宝」という意味を持つ。生涯を平和運動にささげ「沖縄のガンジー」と呼ばれた阿波根（あはごん）昌鴻によって設立された。戦中・戦後を通して阿波根昌鴻が収集した資料（生活品や遺品、手書きの旗や手紙、写真など）が展示されている。色褪せた日本国旗、衣服。白黒の写真たち。使い込まれた様々な生活用品。そしてなんととってもインパクトを与えさせ、埋め尽くされるように書かれた手書きの文字と言葉の数々。当時の様子をととても生々しく感じることができる場所である。



②阿波根昌鴻（あはごんしょうこう）さん

1901（明治34）年、沖縄県国頭郡本部町生まれ。2002（平成14）年に激動の生涯を閉じた。101歳だった。戦前、伊江島にデンマーク式農民学校の建設を志して計画を進めていたが、沖縄戦により土地が失われた。戦後の1900年代、アメリカ施政権下の沖縄で米軍強制土地接収に反対する反基地運動を主導した人物。ヌチドゥタカラの家は、阿波根さんの自宅の敷地内に位置する。

③”ヌチドゥタカラの家”を作った願い

「世界は今、地球を破滅させる核戦争準備を進めている側と、それに反対して人類の平和と幸福を願う側とが対立して争っております。」という一文から始まる、戦後に残された阿波根昌鴻の言葉である。“がらくたの山”が人間の“おろかさ”や“たくましき”を学ぶ資料として、そして作品と共に生命の尊さを再確認したり、戦争を知らない世代へ戦争の恐怖と平和のありがたさを知ってもらうためにこの場所がある。さらに、この場所をきっかけに一人でも多く平和を創り出す人が増えることも願い、そして祈りがある。

◆謝花悦子さんのお話

①謝花悦子さん

謝花（しゃばな）さんは1937（昭和13）年生まれ、2023年で85歳。1944年、謝花さんが7歳のころ、本島に疎開し、翌年伊江島の戦闘により父を亡くす。1947年に帰島。その後、阿波根さんとともにヌチドゥタカラの家を建設し、阿波根さんが亡くなった2002年以降、館長を勤めている。



②「平和の武器は学習」

謝花さんによると、伊江島には戦前生まれの方は謝花さんのほかに2人いるが施設に入り、コミュニケーションがとれる状態の人は謝花さんただひとりだという。今、国民の97%が戦後生まれである。「もういよいよ伝えることができないところまで来た。全てをかけている。」と謝花さんは強い調子で言った。「勉強に余りはない。やればやるほど不足に気付く。平和の武器は学習なんだ。知ることが大事。」と、続けた。

③「命にまさるものはこの世にありません」

伊江島では家族全滅の世帯が多かった。謝花さんの家族とは、「家族全滅した家は、家族全員だから悔いはなかったかも」と話題にしたこともあったそうだ。戦時中、国は罪のない人を巻き込み、戦後の国は傷痍軍人に障害年金、遺族には弔慰金、遺族年金を支払っている。謝花さんの父は戦死した。謝花さんの母と謝花さんら子どもは「金はいらない、本人を返せ」と言っていた。「命にまさるものはこの世にありません」謝花さんは私たちの目を見てそう語りかけた。

【5日目】

◆具志堅隆松さん遺骨収集同行

①具志堅隆松さん

具志堅さんは、遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の代表である。「ガマフヤー」は沖縄の言葉でガマを掘る人という意味。活動を始めて今年で41年になる。福島では大熊未来塾代表木村さんの次女、ゆうなちゃんの大腿骨を発見している。2024年1月にも福島に来てゆうなちゃんの捜索をしている。

②遺骨や血を吸い込んだ土地



戦後は道に遺体がたくさんあったという。その遺骨を集落の住民が集めていたが、そのあまりの多さに頭蓋骨だけ集めてその目に紐を通してガラガラと歩いていったほどであった。壕の中には日本兵の遺骨、道端には住民の遺骨がみつきり、ガマからみつかる遺骨は微細で米粒のような遺骨が多く、取り残しも多い。そんな遺骨や、血を吸い込んだ土地を政府は買い取り、辺野古の埋め立てに使おうとしている。政治家は那覇空港を引き合いに出し、那覇空港の時も同じように沖縄の土を使ったから辺野古もそれと同じだという。

しかし、那覇空港の時は住民たちにその事実を知らされずに使われたのに対し、今、辺野古の埋め立ては知っていてもなおその土が使われる。そしてその用途は軍基地移設に伴う埋め立てであることから具志堅さんは「人殺しのために使われるなど許せない、戦没者への冒瀆だ。」と強く非難している。

③「犠牲者に近づこうとする行為が慰霊になる」

道路から山道に入り、ジャングルのような道を登っていくとガマの入口にたどり着いた。真っ暗な洞窟を懐中電灯で照らし、しゃがみながら中へ入った。そこで私たちは2時間程度遺骨収集をした。土を掘ると、石にも見えるが遺骨にも見えるものがたくさん眠っていた。

「具志堅さん、これはどうですか？」と具志堅さんにそれを渡すと、具志堅さんは金槌のような道具を取りだし土埃をはらい、じっと見つめ、「これは遺骨だね」と言った。遺骨だと言われたものは骨のかたちをしていない。そのかたちは爆撃や自決により骨が爆弾で砕けたことを意味する。洞窟の壁には火炎放射器の黒い跡も残っていた。遺骨とともに、歯や軍服のボタンもみつかった。ボタンは、新しい型だから戦争の最後の方に徴兵された兵士だったんだろう、とのことだった。遺骨がよく出てくる箇所が3箇所あり、3人の兵士がここにいたことが予想される。

遺骨収集が終わったあと、具志堅さんは私たちにこう言った。

「大事なものは遺骨が見つかる、見つからない、ではない。犠牲者に近づこうとすること。それが慰霊になる。」

〇感想

【原萌夏】

遺骨収集をする機会がある、そんな経験が一般人でもできるんだ。こんな些細な興味本位から参加した今回の研修。私にとって沖縄で過ごした5日間は、歴史のことだけでなく、そこに住んでいる人の言葉、町並み、そして何よりも自分と同世代の学生の意思や行動にも刺激を受けました。でもそれは失望とかではなくて、何かを探究する面白さや同世代の活動の幅の広さを知ったからこそ、自分も何か行動しようというモチベーションを持つきっかけになりました。

今回は、大きく2つのことを学びました。まず沖縄研修に行って1番の感想は、観光地の賑やかな雰囲気と戦争があったという歴史の“ギャップの差”が大きすぎるということが1つ目の学びです。あの日あの場所で、人と人とのぶつかり合いが繰り返されていたという事実が想像できないほど、自然の豊かさに囲まれている場所があったり、当時の悲劇さを伝承として形に残している場所の近くにあまり足通りが少ないけれど、重要な歴史があったりと、見えない箇所の事実を知る機会がたくさんありました。

2つ目に何度も足を運ぶことの必要性を実感しました。同じ場所であっても1回では気づかない部分が多かったり、年齢とともに考え方が変化し、捉え方に相違点が出てくることに気づいた時、とても面白いと思いました。

このように何かを始めるきっかけは、私のように本当に些細な興味からでよく、踏み込んでみて初めて興味を深掘りしたり、自分の専門分野と結びつけて置き換えてみたりすればいいということであると思います。それが当事者ではない私たちが、できることの一つであって、そのことについて考え続けていくことが“伝承”の一つでもあるということを知りました。この町との出会い、人との繋がり、この企画に参加できたご縁を大切にしていきたいです。

最後になる前に、語り部の方がおっしゃっていた言葉を残そうと思います。「子供たちには沖縄戦争であったり震災のことであったり、学びましょう。知りましょう。考えましょう。と言う先生が多い。けれど先生自体はどうなのか。知ろうとしない、知らない先生が多くいる。私があなただったら、あなたが私だったら。」子供たちは大人を見て、真似して成

長します。子供に何かを伝える前に、自分自身を問いて考え続けていきたいと気付かされた言葉でした。

最後に、311ゼミに入ることを快く受け入れ、このような機会を提供して下さった武田先生、義岡さんを始めとする大熊未来塾の関係者の方々、沖縄で出会った全て、そして不安いっぱいを中心強い存在でいてくれたまきちゃん。たくさんのご縁に感謝いっぱいです。次はどんな世界に飛び込んで、どんな価値観に出会えるのか、自分自身も楽しみです。ありがとうございました。

【村上真綺】

一人一人何よりも尊重されるべき命があり、その命に軽い重いはない。そう信じています。しかし、実際に沖縄に行き、沖縄戦では命が軽いうに扱われた出来事があまりに多すぎることに気付き、ショックを受けました。また「島人ぬ宝」の歌詞にある、「教科書に書いてあることだけじゃわからない」現実も想像以上の多さでした。沖縄に行かなければ知らないまま教員になってるところでした。第二次世界大戦は遠い昔に起こったことで昔の人は苦勞していたんだなという程度の理解ではなく、想像力を働かせ、具志堅さんの言葉を借りるとその人々に近づこうとしようとする人間、教員でありたいと思いました。

3日目の夜、交流会では香港から来たヘイさんも交えて震災や戦争について語り合った場面もあり、私はその時「『伝える』の実践」ができたと感じました。学生4人とさらささんの5人で、「防災って英語でなんていうんだ?」「ディザスター...プロテクト...?!」など試行錯誤しながらヘイさんに大人たちの会話を訳したり、自分の経験を話したりしました。私は、Google翻訳を使うと私たちの言いたいことと違う訳され方をするのではないかと思い、出川イングリッシュと身振り手振りで、「このツアーでは戦争を学んでいます。昨日はここに行って、」「東日本大震災は(Googleマップを示しながら)ここで起きたんです。震災の時私は8歳で、」「私たちのリーダーは木村さんといいます。木村さんの娘の名前はゆうなちゃんと言って、」「大川小学校は宮城県の小学校。津波が理由で、子ども74人、先生10人が亡くなって、」...とこのような具合で自分でいうのもなんですが私たちは一生懸命に説明しました。そのことが本当に心に残っていて、これから教員として子どもたちと防災を考えていこうとするなかで何度も何度も思い出すことでしょう。

大熊未来塾のみなさん、沖縄で出会った方々、はらもえ、そして機会を提供していただいた武田先生に感謝しています。ここまで読んでくださった方にもありがとうございますと言いたいです。

